

久留米城下町

京隈小路遺跡

— 第 2 次 調 査 —

久留米市京町所在遺跡の発掘調査報告

久留米市文化財調査報告書 第132集



1997. 12

久留米市教育委員会

ごあいさつ

豊かな水と緑に囲まれた久留米市は、古来より生活環境に恵まれ、先人たちの残した貴重な足跡である文化財が数多く存在しています。

京隈小路遺跡の所在する京町校区には、江戸時代に寺院や侍屋敷が整備されたところで、現在でも多くの寺院が残っています。また市街地では唯一の古墳である日輪寺古墳もあります。

今回の調査では、京隈侍屋敷跡の一角を占めるとされる生活跡の他、市街地西域では初めてとなる弥生時代の遺物も確認され、京町校区の歴史が弥生時代にまで遡ることが明らかになりました。

最後になりましたが、発掘調査に際して多大なご協力・ご理解をいただいた地権者の■■■■氏を始め、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成9年12月26日

久留米市教育委員会
教育長 桑 野 善 吾

例 言

1. 本書は、久留米市教育委員会が、■■■■氏の委託を受けて実施した、久留米市京町に所在する京隈小路遺跡第2次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、久留米市教育委員会が主体となり、教育文化部文化財保護課の白木守が担当した。
3. 遺物実測、遺構・遺物の写真撮影、及び図面の清書は白木が実施した。
4. 本書に記した方位はすべて座標北である。また、基準点の座標値は国土調査法第Ⅱ座標系に拠る。
5. 調査に関わる遺物・記録類は、すべて久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管され、活用される予定である。
6. 本書の執筆・編集は白木が担当した。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の概要	5
IV. まとめ	15

I. はじめに

a. 調査に至る経過

本調査は、平成9年8月21日付で、地権者[REDACTED]氏より、久留米市京町223-1における共同住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書が提出されたことに始まる。当該地は北西に日輪寺古墳（前方後円墳）が位置し、さらに一帯は江戸時代には京隈侍屋敷があった場所でもある。これを受けて市教育委員会では8月27日に試掘調査を実施した。その結果、現地表面より20cmの深さで江戸時代の生活面が確認され、さらにその下層20～40cmの深さから弥生時代の遺構面が確認されたため、当該地に遺跡が存在する旨を地権者に回答した。

地権者との協議の結果、建設予定建物の基礎構造が場所打コンクリート杭であり、遺構面までも20cmと浅いため、盛土等による保存は困難と判断し、やむを得ず発掘調査することで合意した。

平成9年9月5日付で、地権者[REDACTED]氏と久留米市長白石勝洋との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を結び、9月8日より発掘調査に入る運びとなった。

b. 調査体制

調査主体：久留米市教育委員会	教 育 長	桑野 善吾		
調査総括：教育文化部	部 長	坂田 博春	社会教育担当部長	矢次 敏孝
文化財保護課	課 長	古賀 幸男	主 査	萩原 裕房
	埋蔵文化財主査	櫻井 康治	文化財主査	松村 一良
	庶務担当	古賀 直喜	試掘調査担当	富永 直樹
	調査担当	白木 守	整理担当	米澤美詠子

発掘調査臨時職員

荒巻美智代・井上喜代香・緒方喜代子・亀山 菊枝・川原紗綾子・川原セキヨ・末安ヨシミ
中園 敬子・野口カオル・平島ツヤカ・深川幾代美・船津 實子・森 一二三・森 フミヨ
森 美佐子・森 美代子

発掘調査整理臨時職員

福田 澄子

c. 調査の方法

建物建設予定部分の130㎡を調査の対象とし、表土は重機により除去した。遺構検出作業・平板による略図作成（1/50）の後、人力で遺構の掘り下げを開始した。遺構の掘り下げが終了した段階で調査区内の清掃を行い、スカイマスター（高所作業車）で調査区全体の写真撮影を実施した。その後、遺構の測量、個別遺構の写真撮影を行い、作業が終了した時点で重機により調査区の埋め戻しを行った。個別遺構図・土層図は1/10で作成し、その他の遺構平面図の作成、及びエレベーションは遺跡調査汎用システム「カタタ」により実施し、そのデータは「カタタ3DC」に記録・保存している。遺構写真はカラーリバーサル35mm、モノクロ35mm・6×7により撮影した。

d. 調査日誌

9月8日 重機による表土の除去を行う。西側は地表面から30cmで遺構面に達するが、東側に移行するに従って深みを増し、東端では1m以上にも及ぶ。

- 9月9日 発掘器材を搬入し、遺構の検出作業を行う。平板による略図作成の後、調査区南側より遺構の掘り下げを開始する。
- 9月10日 トータルステーションによる遺構の測量を開始する。
- 9月11日 S E 15・20・25、S K 30・35、S T 5の掘り下げ開始。S T 5より人骨が出土するが、残り具合は非常に悪い。
- 9月12日 ピットの掘り下げを行う。台風に備えてテントを倒す。
- 9月16日 台風19号到来のため作業中止。大分方面に反れたために被害はほとんどない。
- 9月17日 排水作業、調査区内の清掃を行う。
- 9月18日 スカイマスターにより調査区の写真撮影を実施。
- 9月22日 やや薄曇りの天候。個別遺構の写真撮影を精力的に行う。
- 9月24日 座標移動を行う。
- 9月25日 北壁の土層断面、S T 5の平面・断面実測実施。
- 9月26日 重機により調査区の埋め戻しを行う。発掘器材を撤収し、現地調査を終了する。



Ph.1 発掘作業の様子

なお、整理作業は10月1日～11月28日まで諏訪野町整理事務所において実施した。

Ⅱ. 位置と環境

a. 地理的環境

京隈小路遺跡は、J R久留米駅の西側に位置する。一帯は久留米城下町の京隈侍屋敷跡に相当し、現在では住宅地となっているが、周辺には水天宮をはじめ、梅林寺や日輪寺などの寺社もあり、狭く入り込んだ道路と共にわずかに城下町の名残を止めている。西方には筑後川の流れを望む。筑後川は阿蘇外輪山に源を発し、福岡県域を長く西流した後、久留米城付近で大きく南へ蛇行し有明海へと注ぐ。調査区一帯は低丘陵状の高まりが広がり、標高11m程度を測る。

b. 歴史的環境

京町校区における本格的な発掘調査は今回が初めてとなる。『福岡県遺跡台帳』にも寺社等は多く見られるものの、古代以前の遺跡は日輪寺古墳が見られるのみである。また、試掘調査を含めた調査件数が極端に少ないため、歴史的環境は不明な点が多い。

京隈小路遺跡周辺での生活の営みは弥生時代にまで遡る。試掘調査や今回の調査でわずかながら前期末～中期にかけての遺物が得られている他、明善高校の校庭内からも中期の土器が採集されているものの、遺構などは確認されておらず、今一つ判然としていない。

古墳時代に入っても生活跡は見当たらない。しかしながら市街地唯一の古墳である日輪寺古墳が調査区の北側に現存している。日輪寺古墳はかつては全長50mあったとされる前方後円墳で、西に開口する単室の横穴式石室を有し、石室内には阿蘇凝灰岩製の石障を四壁に巡らせている。また石障の内側には鍵手文と同心円文とを交互に配した線刻による装飾文様が施されている。副葬品には仿製四獣鏡・耳環・石枕な

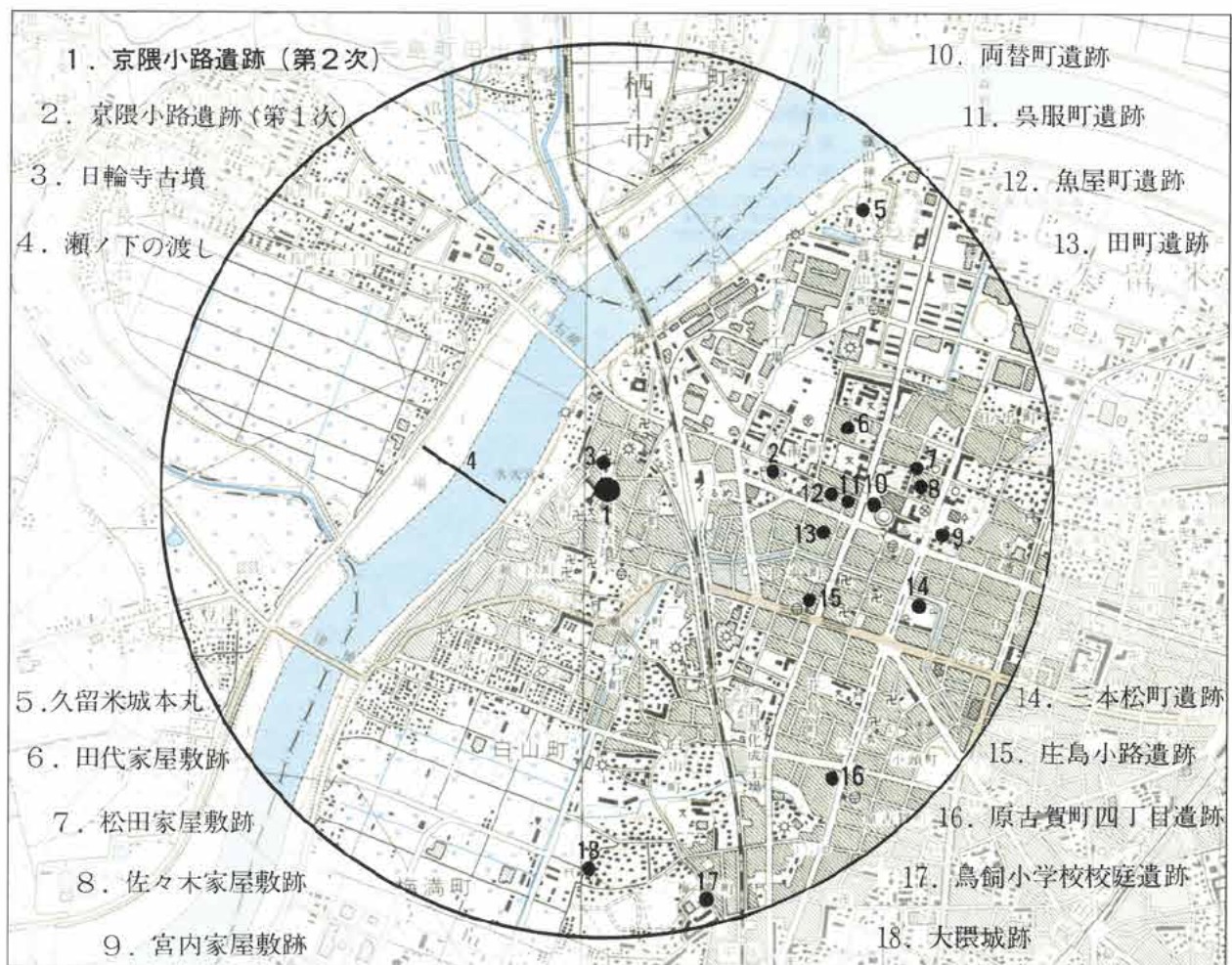
どがみられ、5世紀末～6世紀初頭の築造と考えられている。

律令期の筑後国は10郡を管轄し、京町周辺はその中の三潞郡に含まれていた。平安時代に撰ばれた『和名抄』によれば三潞郡中に8郷の名が見え、いくつかの遺称地の比定がなされている。その結果、京町一帯は現在の久留米市梅満町周辺に中心地が推定されている鳥養郷に属していたものと考えられる。京隈小路遺跡第1次調査では奈良時代の土坑が1基検出され、土師器の細片が出土している。

中世は「くるめ」の名が初めて文献に登場する時期である。鎌倉時代から確認できる高良荘は800町を超す荘園で、現在の市街地付近にその荘域が比定されている。今回の調査で中世後期の遺物がわずかに出土した他、両替町遺跡の調査でも井戸や溝が確認されており、久留米城築城前後の一端が偲ばれる。天正15(1587)年の毛利秀包の入城により、中世期は終焉を迎えることとなる。

先の毛利氏、田中吉政の治世の後、1621年に入城した有馬豊氏以降、城下町の整備が本格的に開始される。この整備は以前まで谷部であった部分も台地を削平して埋め立て、そこに町屋を建設するなど、大規模なものであった。その結果、従来の地形が大きく改変されることとなる。また京町周辺には寺社や侍屋敷が配置された(京隈侍屋敷)。この京隈侍屋敷には約140軒の屋敷が、城郭と寺社に挟まれて存在する。

200年以上も侍屋敷としてその役割を果たした京町地区も、明治時代に入ると鉄道開通などによって大きくその姿を変え、現在では一部の地域において当時の区画が認められるのみとなっている。今後、JR久留米駅周辺の再開発が進めば、さらなる変貌を遂げることになるだろう。



第1図 京隈小路遺跡を中心に見た周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 延寶八年図 (1680)



第3図 天保年間図 (1830~1844)



第4図 京隈小路遺跡第2次調査区位置図 (1/2,500)

Ⅲ. 調査の概要

a. 基本層序

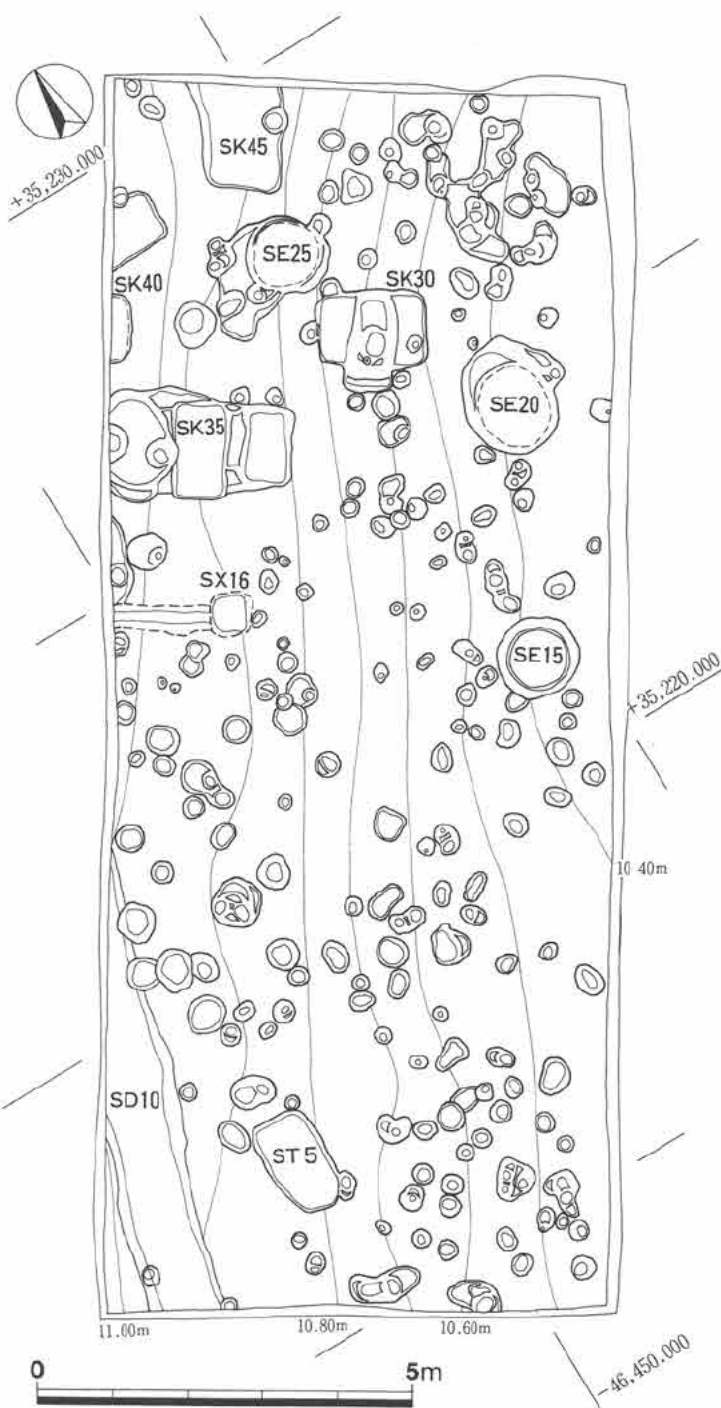
遺構検出面は、西側から東側に向かって緩やかに傾斜しており、両端で1 m近い高低差がある。ここでは北壁の土層観察に基づき、層序を記す。アスファルト・バラスの下は旧家屋の瓦・煉瓦・礫などの廃材により一部に攪乱を受けている。黄褐色土層（③層）は当初、近世の整地層とも考えられたが、明瞭な遺構や堆積は確認できなかった。⑩層の黒褐色土層はやや粘質で硬く、遺物はほとんど認められない。その下に暗灰褐色土が薄く堆積している。

b. 検出遺構

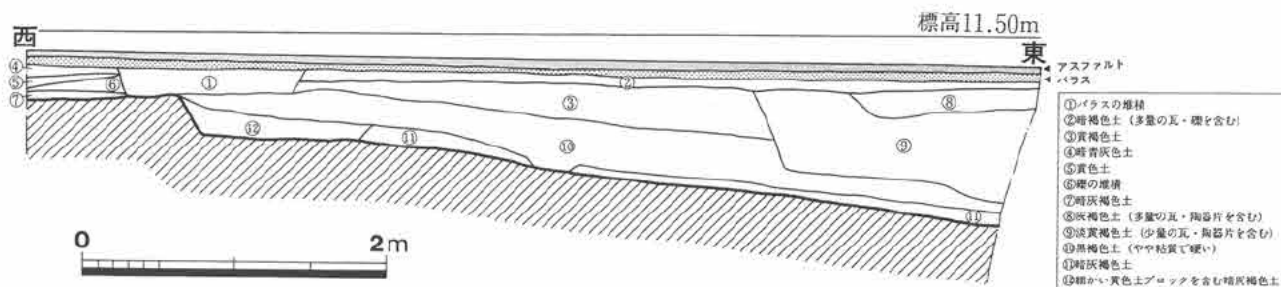
溝1条・井戸3基・土坑4基・土墳墓1基・ピットを検出した。大半は近代の遺構であるが、土墳墓や溝からは時期が特定できる資料がほとんど出土しておらず、時期比定が困難である。

溝

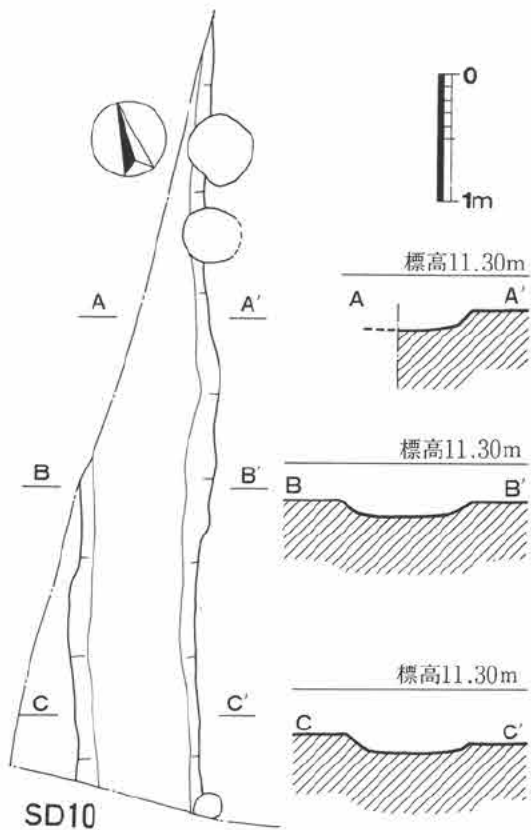
SD 10（第7図） 調査区の南西端で検出した南北溝である。幅1 m前後、深さ10cmを測り、溝の断面は浅い逆台形を呈する。埋土は灰茶色土で、西側の一部には黄褐色地山土のブロックが堆積していた。底面は北側から南側に向かって緩やかに傾斜しており、調査区内でも数cmの高低差が認められる。出土遺物は少なく、弥生土器片9点、土師器の土鍋細片3点到過ぎない。



第5図 京隈小路遺跡第2次調査遺構配置図（1/100）



第6図 北壁土層断面実測図（1/50）



第7図 SD10実測図 (1/60)

井戸

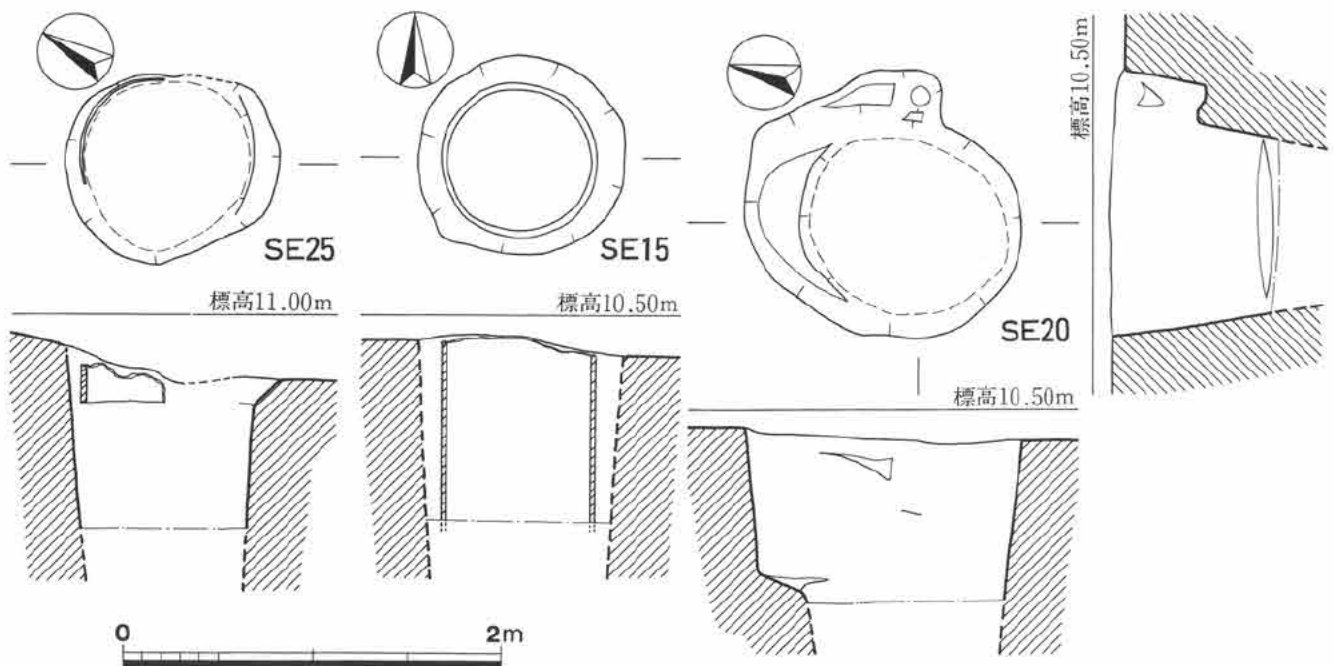
SE15 (第8図) 径1.20mの円形を呈する井戸で、内部に径80cmのコンクリート製の井戸側を有する。埋土には多量の砂利を含み、人為的に埋められた状況を呈している。近代の陶磁器や瓦、鎌先などが出土した。未完掘。

SE20 (第8図) SE15の北側に位置し、平面プランが楕円形を呈する井戸である。上面から80cmほどのところで北側に段を有する。深さは完掘していないため不明であるが、ボーリングステッキを差し込んだ結果、更に1m以上は深くなることが判明した。埋土は暗灰褐色粘質土であった。出土遺物には磁器碗・皿・蓋・水滴、陶器碗・鉢・播鉢・瓶・急須、色絵磁器、青磁花生、土師器燈明皿・焙烙、瓦質鉢、土鈴、角釘、硝子碗などが見られる。時期的には18世紀後半のものが多く、一部に18世紀末～19世紀初頭のものを含んでおり、この頃に埋められたものと考えられる。

SE25 (第8図) SK30の北側に位置し、平面プランが円形を呈する井戸である。SE15と同様、径80cm程度のコンクリート製の井戸側を有している。近代の陶磁器が出土しており、井戸の構造から見てもSE15とほぼ同時期の所産と考えられる。未完掘。

土坑

SK30 (第9図) 平面プランが長方形を呈する土坑である。中央部にピット状の掘り込みが見られ、

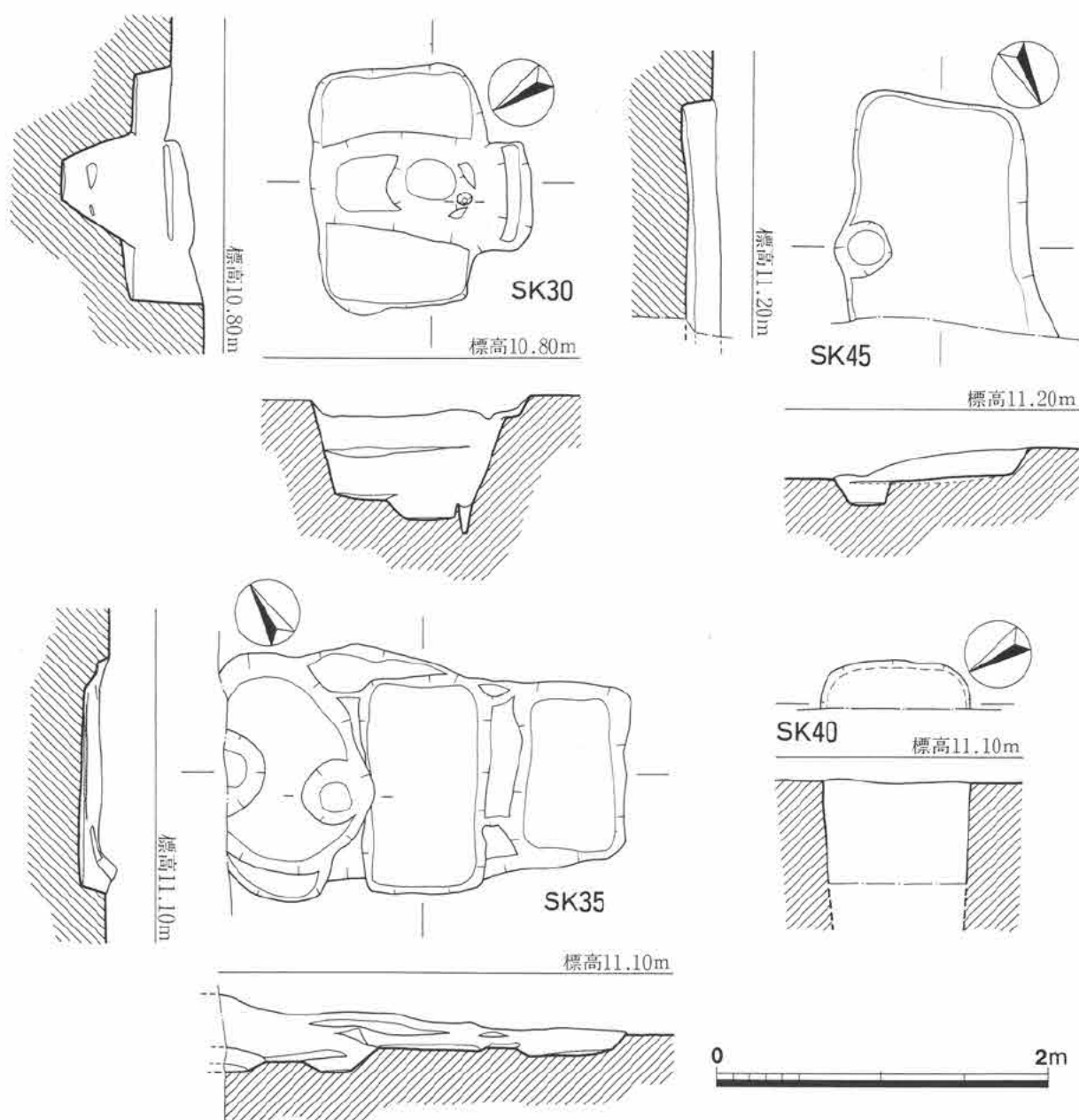


第8図 SE15・20・25実測図 (1/40)

最も深くなっている。また東西にはそれぞれ段を有し、南側にやや張り出しが認められる。性格については便所や竈などが考えられるが、焼土等の出土は見られない。出土遺物には近代の陶磁器、コンクリート片、ガラス瓶、ビー玉などが見られることから、さほど古い遺構ではないようである。

S K 35 (第9図) 平面プランは概ね長方形を呈するが、数度にわたる掘り直しが行われたようで、底面はかなりの凹凸が見られる。埋土はパサパサの灰褐色土で柔らかかった。出土遺物にはコンクリート片や近代の陶磁器が見られるが、量は多くはなく、単なるゴミ穴かどうかの判断はできない。

S K 40 (第9図) S K 35の北側に位置し、西側は調査区外に延びているために全容は不明であるが、平面プランは方形を呈するようである。埋土中には焼土や石炭なども含まれている。出土遺物には近代の陶磁器、鉄鍋、プラスチック製のボタンなどがあり、S K 30やS K 35と同様にさほど古い遺構ではない。未完掘。

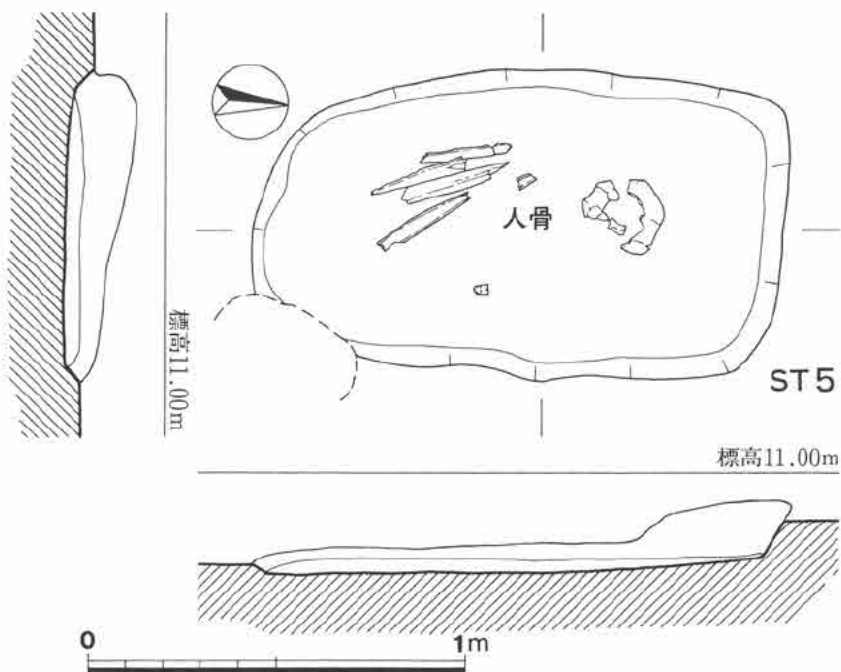


第9図 S K 30・35・40・45実測図 (1/40)

SK45（第9図） 調査区の北隅で検出した土坑で、平面プランは概ね長方形を呈する。東側のピットとの先後関係は不明。深さは西側でも20cmと浅く、底面はフラットである。埋土は硬い暗茶褐色土で、遺物の出土は皆無である。ただし、他の遺構の埋土状況から見る限りでは、少なくとも中世期以前には遡るものと判断される。

土墳墓

ST5（第10図） SD10の東側で検出した土墳墓である。長軸1.40m、短軸0.83m、深さ5～15cmを測る。埋土は硬い暗茶褐色土で、細かい黄色土ブロックをわずかに含んでいた。出土遺物は皆無で時期は不明であるが、底面からは人骨の出土が見られた。人骨の残り具合は非常に悪く、取り上げ時にはポロポロになるほど土壌化が進んでいた。頭位は北側にあり、南側には大腿骨と脛骨と思われる骨の痕跡が4本重なった状態で検出された。主軸方位はほぼ真北を示している。いわゆる横臥屈葬の姿勢を執っており、頭北西面に倣ったものと考えられる。

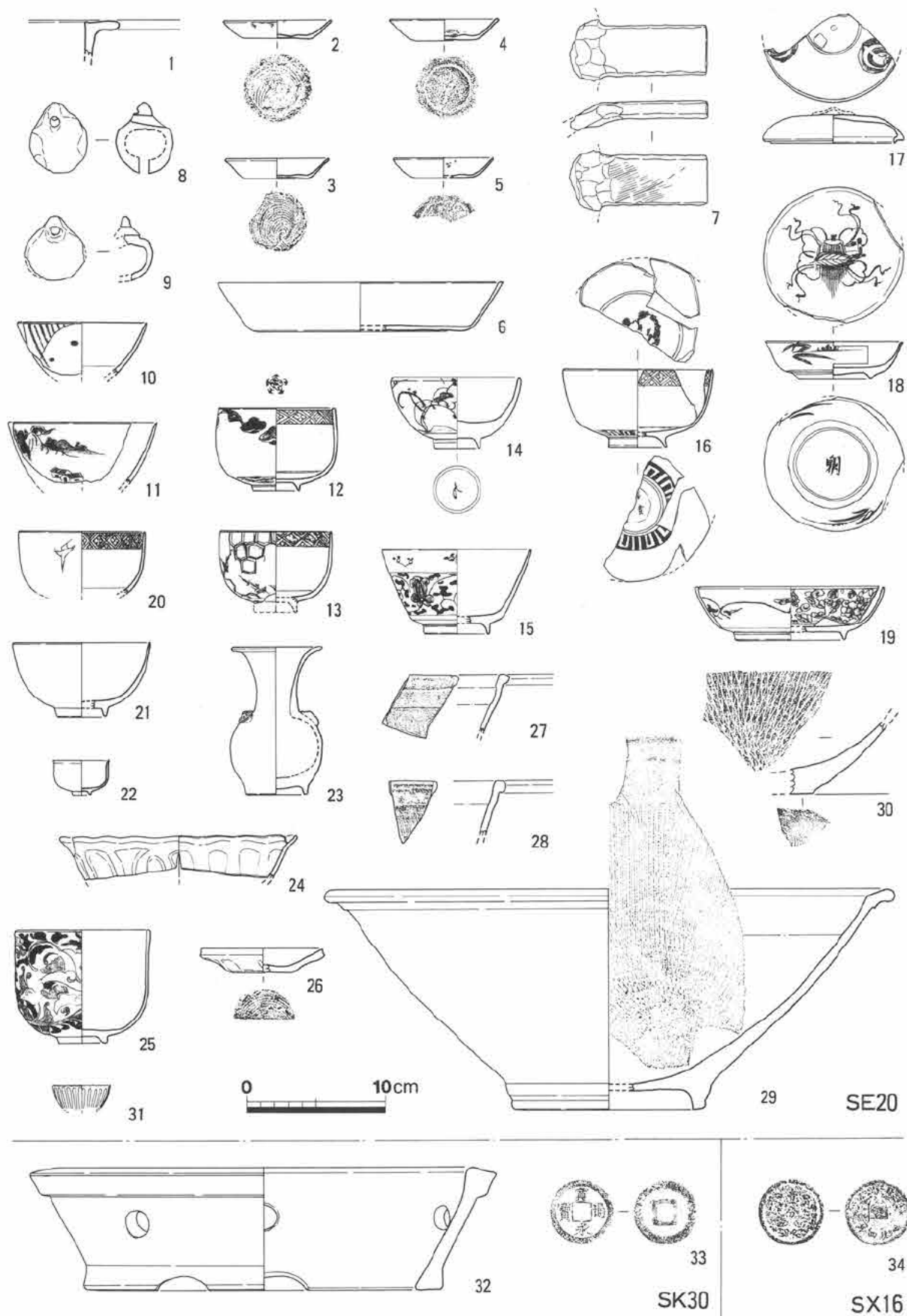


第10図 ST5 実測図 (1/20)

c. 出土遺物

総数でパンコンテナー2箱分の遺物が出土した。その内訳は弥生土器から近代の陶磁器まで多岐に及ぶが、大半が近現代の遺物で占められている。

1は弥生土器で、全体に摩耗が激しい。中期の所産。2～5は土師器の小皿で、3以外は油煙の付着が認められる。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は金雲母・微砂粒を含む精良。底部はすべて回転糸切り離しである。6は焙烙で外面には煤が付着し、見込には焦げ跡が残る。7は十能の把手と考えられる。表面は刷毛目調整で煤の付着が認められる。8・9は土鈴である。色調はにぶい橙色を呈し、金雲母・細砂粒を含む。10～16は染付碗である。10は外面に丸文、内面に圈線を描く。11は外面に家屋・遠山・雲文を描く。内面は無文。12は外面に松、高台付近には波、内面に四方禪文を描く。見込みには五弁花文を描く。13は外面に亀甲繫ぎと草文、内面に四方禪文を描く。貫入あり。14はかなり肉厚で体部は丸みを帯びる。外面に梅文？と簡略化した雪輪を描き、高台内には記号？を有する。また畳付には砂目跡が認められる。15は体部が直線的に開きながら立ち上がるタイプで、外面に唐草文を描く。貫入あり。16は外面に花卉、内面に四方禪文を描き、見込みには松竹梅の円形文を描く。高台内には文字が描かれ、「富貴長春」と思われる。17は段重の蓋で、つまみを欠損する。丸文を描く。18は朝妻焼の小皿である。胎土は砂粒をほとんど含まない白色の精良で、透明釉がかかる。見込みには蕉葉と隠簀による宝を描く。外面には草花文を描き、高台内には「朝」の字を描く。19は磁器の小皿で、外面に花唐草、内面に牡丹唐草、見込みに2条の圈線、高台内にも1条の圈線を巡らせる。20は色絵の碗で、外面に赤絵で鳥文を描き、内面には四方禪



第11図 SE20・SK30・SX16出土遺物実測図 (1/4, 銭貨は1/2)

文を描く。貫入あり。21は白磁の碗で口縁端部がわずかに鍵状に内反する。釉色は乳白色を呈する。22は白磁の盃である。全体に薄手作りで胎土は白色の精良。23は完存品の青磁の花生である。肩部にボタン状の突起を2箇所設け、畳付は露胎で砂目跡が残る。口縁部は大きくラッパ状に開き、内面の上部にまで淡緑色の釉がかかる。24は青磁の中皿で、口縁部は輪花を呈し、淡緑色の厚手の釉がかかる。25は陶器の碗で関西系と考えられる。外面は暗茶色の化粧土を施した後、藍色・山吹色・乳白色で花唐草を描く。内面は透明釉のみで無文。26は陶器の小皿で燈明皿と考えられる。外面には釉垂れが認められる。27～30は陶器の播鉢で、27・28は口縁部片。30は底部片で糸切り離し。29は22本単位の播目を施し、見込みと畳付に砂目跡が残る。31はガラス製の小碗で口縁部は短く外反し、外面に蓮弁を施す。器壁は1mm余りと薄手である。風化が著しい。32は敷輪^{しまわ}で、竈や七輪にのせる鍋の大きさによって取り換えるものである。33は寛永通寶。34は満州国貨幣の壹分銭で、康德四年（1937）の製造である。35は『味の素』の看板である。

第1表 京隈小路遺跡第2次調査出土遺物一覧表

No.	遺構名	材質	器種	口径	底径	器高	長さ	幅	厚さ	備 考	遺物登録番号
1	SE20	弥生土器	甕			(2.6)					199722-00003
2	SE20	土師器	小皿	7.9	4.9	1.5				糸切り、燈明皿	199722-00004
3	SE20	土師器	小皿	7.6	4.6	1.5				糸切り	199722-00006
4	SE20	土師器	小皿	7.9	4.7	1.6				糸切り、燈明皿	199722-00005
5	SE20	土師器	小皿	7.2	4.2	1.4				糸切り、燈明皿	199722-00007
6	SE20	土師器	焙烙	20.6	15.6	3.6					199722-00008
7	SE20	土師器	十能				(9.9)	3.6	1.3		199722-00009
8	SE20	土製品	土鈴				5.1	4.2			199722-00010
9	SE20	土製品	土鈴				4.6	(4.4)			199722-00011
10	SE20	磁器	碗	9.4		(3.9)				肥前.18c後半	199722-00014
11	SE20	磁器	碗	10.8		(4.5)				肥前.18c後半	199722-00018
12	SE20	磁器	碗	8.4	3.5	6.0				肥前.18c後半	199722-00016
13	SE20	磁器	碗	8.2		(5.2)				肥前.18c後～19初	199722-00020
14	SE20	磁器	碗	9.4	3.6	5.1				肥前.18c後半	199722-00015
15	SE20	磁器	碗	10.8	4.8	6.1				肥前.18c後半	199722-00019
16	SE20	磁器	碗	10.8	4.2	5.6				肥前.18c後半	199722-00017
17	SE20	磁器	蓋	10.2		(2.1)				肥前.18c後～19初	199722-00023
18	SE20	磁器	皿	10.0	6.8	2.7				朝妻焼.18c前半	199722-00021
19	SE20	磁器	皿	13.6	8.2	3.9				肥前.17c末～18初	199722-00022
20	SE20	色絵	碗	9.2		(4.4)				肥前.18c後半	199722-00027
21	SE20	白磁	碗	10.0	3.9	5.4					199722-00013
22	SE20	白磁	盃	4.1	1.4	2.5					199722-00024
23	SE20	青磁	花生	6.6	4.5	10.7				肥前.18c	199722-00030
24	SE20	青磁	皿	17.2		(3.1)				肥前.18c	199722-00031
25	SE20	陶器	碗	9.9	3.8	8.3				関西系	199722-00032
26	SE20	陶器	皿	9.0	4.0	1.8					199722-00034
27	SE20	陶器	播鉢			(4.2)					199722-00036
28	SE20	陶器	播鉢			(4.0)					199722-00037
29	SE20	陶器	播鉢	41.2	14.0	15.9					199722-00035
30	SE20	陶器	播鉢			(5.2)					199722-00038
31	SE20	ガラス	碗	4.2		(1.7)					199722-00039
32	SK30	土師器	敷輪	33.5	25.9	8.9					199722-00040
33	SK30	銅製品	銭貨				2.35			寛永通寶	199722-00047
34	SX16	銅製品	銭貨				2.35			壹分銅貨（満州銭）	199722-00002
35	SE15	鉄製品	看板				45.0	30.0	0.2	味の素	199722-00001

各数値の単位はcm. ()の数値は現存値である。



Ph. 2 京隈小路遺跡第2次調査区全景（南西から）



Ph. 3 北壁土層断面（南から）



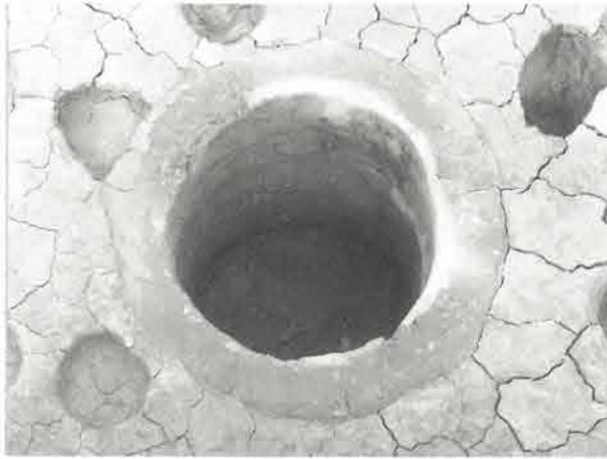
Ph. 5 SD10土層断面（南から）



Ph. 4 ST5人骨出土状況（東から）



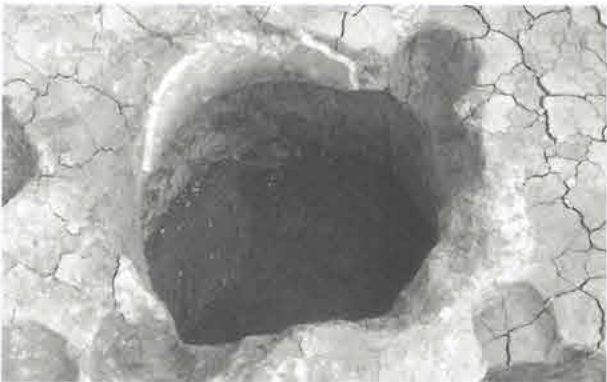
Ph. 6 SD10完掘状況（南から）



Ph.7 SE15全景（北東から）



Ph.8 SE20全景（北東から）



Ph.9 SE25全景（南西から）



Ph.10 SK30完掘状況（北東から）



Ph.11 SK35完掘状況（南西から）



Ph.12 SK40全景（北西から）



Ph.13 SK45完掘状況（南東から）



Ph.14 調査区から日輪寺古墳を望む（南から）



P.h.15 京隈小路遺跡第2次調査出土遺物（1）



Ph.16 京隈小路遺跡第2次調査出土遺物（2）

N. ま と め

弥生時代の生活跡 いくつかのピットから弥生土器や黒耀石剥片が出土しているが、時期が窺える資料はS E 20出土の中期に比定できる甕のみである。また、試掘調査時には前期末に比定できる甕片の出土も見られ、この時期の遺構が周辺に存在していることを匂わせている。なお、本調査区の南隣りでも試掘時に弥生土器が出土している。このように断片的な資料しかないものの、少なくとも京町校区の歴史が弥生時代にまで遡ることが明らかとなった。

土墳墓の時期 人骨以外の遺物は出土していないため、時期を決定づけることは困難であるが、頭位がほぼ真北を向き、脚を折り曲げていることから、いわゆる「頭北西面」の体勢をとっていると思われ、中世以降の年代が考えられよう。また、埋土から見ても江戸時代以降のものとは異なっており、中世期に比定できよう。さらに土墳墓の西側に位置する溝（S D 10）も概ね南北方向に流路をとっており、両者が関連した遺構と考えるならば、溝出土遺物の中に胎土・調整から見て14世紀以降に比定できる土鍋片が見られることから、この時期に位置づけられよう。

久留米城と城下町 正確な築城時期は明らかでないが、中世末には既に城としての機能を果たしていたようである。天正15（1587）年に毛利秀包^{ひでかね}が、豊臣秀吉の「九州国割り」により久留米城に入城するが、史料が少ないためにこの時期の状況は判然としない。後にキリシタンとなった秀包は城下に教会を設けることとなる。続いて慶長6（1601）年には、関ヶ原の戦いの功賞として筑後一国の国主となり柳川城に入城した田中吉政^{よしまさ}の次男則政^{のりまさ}が入城し、城下町の建設や用水工事・交通網の整備に着手するが、本格的な城下町の建設は元和7（1621）年に入部した有馬豊氏^{とようじ}の代に始まる。その後有馬氏は明治4（1871）年の廃藩置県までの11代 250年もの長きにわたって久留米藩を治め、武家屋敷や町屋の建設、二の丸・三の丸・外郭の拡充整備などに着手することとなる。久留米といえば「有馬」と云われる所以である。現在の久留米城はわずかに旧本丸の城壁と堀の一部を残すのみで、本丸跡には旧藩主の御霊を祭る篠山神社^{ささやま}と、遺品などを展示する有馬記念館が存在している。

侍屋敷の形成 久留米城下には西に京隈^{きょうくま}、南に莊島^{しょうじま}、東に櫛原^{くしはら}の侍屋敷が配されている。『天保年間図』などを見れば、この三箇所の侍屋敷は城郭と寺院とに挟まれて存在することが分かる。侍屋敷の成立の背景には、久留米城の防御や城郭の拡張に伴う屋敷の移転といった問題も絡んでいる。

京隈侍屋敷について 京隈侍屋敷とは現在の京町を中心に置かれたもので、城下に配置された3箇所の侍屋敷の中では最も西方に位置する。4代藩主頼元^{よりもと}の頃（1670年前後）にはほぼ完成を見たようで、『延寶八年図』（1680）には京隈侍屋敷の中に140軒ほどの屋敷が記されている。また約150年後に描かれた『天保年間図』（1830～1844）にも同じく140軒ほどの屋敷が見られるが、この間に100軒近くも屋敷の居住者が入れ替わっている。

西尾家の屋敷 『天保年間図』によれば、本調査区は京隈侍屋敷の中の「西尾家」の屋敷内に含まれることが窺える。この西尾家は先の『延寶八年図』にもその名が見られ、少なくとも200年以上はこの地で生活を営んでいたことが分かる。今回の調査では江戸時代の井戸（S E 20）が1基検出されており、出土遺物から見て西尾家の屋敷に伴うものと考えられるが、建物などの遺構は確認できなかった。なお西尾家の東隣りには、明治時代に活躍したロマン派画家である坂本繁二郎（1882～1969）の生家が現存しており、屋敷境いの溝がわずかに名残りを止めている。

その後の侍屋敷 このように17世紀中頃から 200年以上にわたって続いた侍屋敷であるが、近代以降の街づくりによって急速に衰退していくこととなる。特に京隈の侍屋敷は、明治22年の九州鉄道（後の日本国有鉄道）の開通を契機として久留米駅西側に置かれた貨物ターミナルや工場の建設、明治44年の京町小学校の開校などにより、大きな変化を遂げていった。現在では『天保年間図』に見られた侍の名を周辺域で見いだすことはできないが、京町小学校付近では当時の侍屋敷の区画をわずかに偲ぶことができる。

朝妻焼^{あさつまやき}とは 久留米藩の御用窯として18世紀前半に操業を開始したものの、肥前磁器の広域流通には勝てず、わずか10数年で閉窯を余儀なくされた窯である。窯跡は現在の久留米市合川町の福聚寺付近に所在する。製品には染付磁器・白磁・青磁・陶胎染付・陶器などが見られ、高台内には「朝」「朝」の銘が記されている。久留米市周辺が流通の中心であるが、一部、江戸や神奈川などの遠隔地でも出土している。今回の調査ではS E 20から皿が1点出土した。S E 20では18世紀後半の遺物が主体であり、朝妻焼の時期とは大きな齟齬を生ずる結果となっているが、文献に見える1720年代の閉窯の信憑性について再検討の余地を残す結果となった。

味の素の看板について S E 15から『味の素』の社名入りの看板が出土した。この看板には「株式会社鈴木商店」の銘が書かれている。現在の『味の素株式会社』は大正6年（1917）に『株式会社鈴木商店』として誕生し、昭和7年（1932）に『味の素本舗鈴木商店』と改名、昭和21年（1946）から現在の社名を用いている。同社によれば、大正11年から昭和7年にかけて社内に看板班を組織し、全国に看板を設置したとのことである。このことからS E 15出土の看板は、大正末期から昭和初期の所産と考えられ、井戸の使用開始年代がこの時期以前に遡ることが明らかとなった。

本書の執筆に際し、S E 15出土の看板については味の素株式会社福岡支社総務部の澤野氏に多大なるご指導を賜った。また陶磁器については吉田寛氏（大分県教育委員会）の他、久留米市教育委員会文化財保護課の大石昇・園井正隆両名のご教示を頂いた。記して感謝いたします。

《参考文献》

- 久留米市史編さん委員会『久留米市史』第2巻 1982年
- 久留米市史編さん委員会『久留米市史』第3巻 1983年
- 『写真でみる日本生活図引4ーすまうー』 弘文堂 1988年
- 『別冊太陽ー古伊万里』 平凡社 1988年
- 大橋康二『肥前陶磁』 考古学ライブラリー55 1989年
- 久留米市教育委員会『三本松町遺跡』 久留米市文化財調査報告書第74集 1992年
- 水原道範「朝妻焼の古窯跡調査」『福岡の陶磁展』 佐賀県立九州陶磁文化館 1992年
- 大橋康二『古伊万里の文様ー初期肥前磁器を中心にー』 理工学社 1994年
- 久留米市史編さん委員会『久留米市史』第12巻 資料編（考古） 1994年
- 久留米市教育委員会『久留米城下町ー両替町遺跡』 久留米市文化財調査報告書第116集 1996年

報告書抄録

ふりがな	く る め じょうかまち きょうぐまこうじいせき だい2 じちようさ							
書 名	久留米城下町 京隈小路遺跡 第2次調査							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第132集							
編 著 者 名	白木 守							
編 集 機 関	久留米市教育委員会							
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 ☎（0942）30－9225							
発行年月日	1997（平成9）年12月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北 緯 。 。 〃	東 経 。 。 〃	調査期間	調査面積	調査の原因
おうぐまこうじいせき 京隈小路遺跡 だい2 じちようさ 第2次調査	ふくおかけんく る め し 福岡県久留米市 きょうまち 京町	40203		33 度 19 分 00 秒	130 度 33 分 04 秒	1997.9.8～ 1997.9.26	114㎡	共同住宅建設
所収遺跡名	種別	時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
京隈小路遺跡	集落跡 集落跡 屋敷跡 屋敷跡	弥 生 室 町 江 戸 近 代	溝 1 条 土墳墓 1 基 井 戸 1 基 井 戸 2 基 土 坑 3 基		弥生土器、黒耀石 土師器（土鍋）、人骨 陶磁器（古伊万里・朝 妻焼）、土鈴、 陶磁器、ガラス瓶、鉄 鍋、『味の素』の看板		弥生時代では遺物が わずかに散布している のみで、明瞭な遺構は 認められない。 江戸期の屋敷跡は絵 図にも残る「西尾」家 の遺構と考えられる。	

何が分かったの？

京町小学校の北側には、市街地に現存する唯一の古墳である日輪寺古墳にちりんじがあります。この古墳が造られたのは今から1500年ほど前の古墳時代ですが、今回の調査で見つかった弥生土器は、それよりもさらに700年も前に焼かれたものです。これにより、京町の歴史が弥生時代にまで遡さかのぼることが明らかになりました。

天正15年(1587)の毛利秀包もうり ひでかねの入城により久留米城下町が形成されますが、本格的な城下町の整備は1621年に入国した有馬豊氏ありま とうじによってなされます。延寶八年(1680)の絵図には京町付近に侍屋敷が置かれていたことが記されており、今回調査した範囲はその絵図中に見える西尾家の屋敷内に相当します。この西尾家の東隣りには、明治時代の口マン派画家坂本繁二郎さかもとはん じろうの生家があり、繁二郎も侍屋敷の名残りを目の当りにしていたことが想像できます。井戸から出土した茶わんやお皿などの生活用具は、西尾家の家人が使用していた物でしょう。

久留米城下町 京隈小路遺跡 ―第2次調査―

(久留米市文化財調査報告書 第132集)

平成9年12月26日

発行 久留米市教育委員会
久留米市城南町15-3

編集 教育文化部 文化財保護課

印刷 香和印刷株式会社
久留米市津福本町2320-15